

## 学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長 殿

授業担当者

所属/職名: 医歯学域医学系教授

氏 名: 丸谷美紀

授業科目名	家族看護論
研修先(国・地域) 滞在地	国名: 米国 滞在地: ボストン
研修期間	平成 28 年 9 月 3 日 ~ 平成 28 年 9 月 10 日
〔研修の成果〕 トリニティ教会では、生活困窮者への食事・住居・保健医療の提供状況の実際を知り、鹿児島の状況と比較し、自国の生活困窮者の健康支援への関心を高めることができた。ボストン小児病院では、遠方から受診する家族のための宿泊施設が周辺に多数あり、家族全体を支援していることを知った。離島やへき地という交通条件の悪い地域に対し、船便や航空便等を整備することは経済や教育の利便性のみならず、健康に非常に影響を与えることを再確認した。また、ナースプラクティショナーが、心身の状態をアセスメントし、必要な処置・処方ができることで患者のニーズに速やかに対応できることを知り、離島やへき地の家族看護に非常に有効であると学んだ。ボストン大学では、演習風景を見学し、個室での学生同士の演習や、状況設定された演習の様子に、より実践に近い演習の必要性を実感した。また、ナースプラクティショナーの教育について説明を受け、自己の看護観を確立させる重要性を認識した。ハーバード公衆衛生大学院では、イチロー・カワチ教授と面会し、直接に健康の社会決定要因の重要性を伺い、勉学への動機づけが高まった様子だった。社会疫学研究の授業を聴講させていただき、教育・経済等が非常に健康に影響していることを再確認した。授業後、大学院生やポストドクターと交流し、進学動機・進学準備大学究生活を知り、今後の学部での学びや将来の進路選択に意欲が高まった様子だった。大学院生が活発に授業参加し、聴講者である自分たちにも積極的に声をかける様子から、勉学も保健活動の実践も、多くの人々と知恵や情報を交換することで、より高次の学び・実践に結びつくことを実感した様子だった。	
〔今後の課題〕 今回の研修は事前学習を英語で進め、現地でも予習・復習の時間を持ち、学びを確認した。大学院生も同行したことで、看護実践現場の様子と結びつけて理解が深まったようである。今後も、研修中の学びの確認を継続したい。また、ボストン大学では、演習場面の見学のみであったため、今後は可能な限り、実際に演習に参加し、日本と米国の家族の問題や家族看護の実際を体験できるよう工夫したい。また、ボストンは公共交通機関が便利のため、公共交通機関で施設間を移動したため、町の様子を細かく観察できた。今後も可能な限り、現地の人々と同様の移動手段で現地に密着した研修生活として行きたい。	